“给”使役文の一考察
－再帰動詞との関わりをめぐって－

李　孟娟

現代中国語の“给”を含む構文には、さまざまな文構造と意味機能が知られている。本稿において筆者が注目しているのは、使役を表す“给”構文の構文上の特徴である。

この構文によって表される使役では、使役者から被使役者へのものや行為の授与が含意されることを先行研究の山田（1999：23-30）、佐々木（1999：207-216）などがすでに指摘している。本稿では、『日中対訳コーパス』を利用して、日本語学等で用いられている「再帰動詞」という概念を取り入れ、中国語の「再帰動詞」の分類を試みる。さらに、“给”の後にくる動詞の特徴について詳しく分析を行う。後の動詞が再帰動詞の場合、文全体が使役の意味を表しうるが、後の動詞が純粋の再帰動詞でない場合、二項他動詞構文となり、再帰用法とはならないことがわかった。つまり、再帰的な用法をもつが、そうでない用法ももちうる場合、専ら授益の意味を表す。一方、後の動詞が非再帰動詞の場合、文全体は使役を表すパターンと授益を表すパターンが存在しうるが、特に使役を表す時、動詞は典型的な他動詞ではないことを指摘する。

キーワード：给・使役構文・受益構文・再帰動詞

はじめに

“给”を含む構文でよく知られているのは、授与動詞として二つの目的語を取る用法である。Li & Thompson（1981：371-389）や張斌（2010：618-621）などがそれについて、詳しく述べている。使役を表す“给”構文に関しては、Li & Thompson（1981）は次のように指摘している。

The first construction involving a preverbal *gěi* phrase whose noun phrase is neither an indirect object nor a benefactive involves the verbs *kàn* ‘see’ and ting ‘hear’, usages in which it conveys a special meaning of allow to see and allow to hear.[1] For example:

(1) qǐng　nǐ　gěi　wǒ　kàn　nèi　－　běn　shū
please　you　to　I　look　that　－　CL　book
Please let me look at that book.

(2) wǒ　chàng　－　gē　gěi　nǐ　ting
I　sing　－　song　to　you　hear
I'll sing for you to hear.

日本語に要約すれば、“给”を含むこの種の構文は「見せる」と「聞かせる」を含む意味になる。Li & Thompson (1981) は授与動詞としての“给”の用法については詳しく述べているが、このような構文の記述は、詳しくない。例えば、「見る」「聞く」に対応する使役文の他に、どんな動詞が使役構文に使われるかについて述べていない。

“给”を含む使役構文で用いられる動詞に関して、制約があることを述べている先行研究として、田中 (2001 : 135-156) が挙げられる。田中の場合は、“给”を含む使役構文に使う動詞を人間の五感に関係する動詞と身体に物理的な影響を及ぼす動詞とに分けて、この２種類の動詞を用いる場合に、文全体が使役の文に解釈されやすいと見ている。また、身体に物理的な影響を及ぼす二項他動詞文が用いられたときには、被使役者の動作主性が低くなり、使役文の表す意味が受益文に非常に似てくることを指摘している。

1　再帰動詞について

本節では、“给”構文に密接に関係する動詞下位分類として「再帰動詞」の概念を導入する。まず日本語の再帰動詞について、先行研究を挙げながら日本語の再帰動詞の特徴をまとめる。次に中国語の再帰動詞を考察する。中国語の再帰動詞に関わる先行研究で、同様の視点からの研究としては、張 (1993 : 531-555) がある。しかし、本稿は張を参照としながらも、張と異なる分類を試みる。またその理由についても述べる。

1.1　日本語の再帰動詞

「再帰動詞」に関しては、仁田 (1982 : 79-90) が初めて再帰動詞と他動詞の再帰的用法を分けて提示した。再帰というのは「働きかけが動作主に戻ってくることによって、その動作が終結を見るといった現象」である。再帰的な用法しか持たない「着る、はく、脱ぐ」のような動詞を「再帰動詞」、普通の他動詞でありながら、その中で一つの用法として再帰的な用法を持っている場合、その用法を「再帰用法」と呼ぶ。仁田によると、例えば、日本語の「髪を切る」は、再帰用法をもつことはあるが、再帰動詞ではない。

一方、『日本語百科大事典』の中でも「再帰動詞」に関する定義を記述している。「他動詞の中には、『着る』『履く』『あびる』のように、動作の結果、動作の主体に変化の生じるものがあるが、これを『再帰動詞』と呼ぶことがある」としている。

また、工藤 (1995 : 69-80) は再帰動詞と自動詞が近いということを使役・他動・自動との関わりの中で説明している。使役・他動は参加者が２項以上の主体から、客体へと働きかける外的運動であり、自動・再帰は、参加者が１項の、働きかけ性のない内部運動であると指摘している。

以上の先行研究から日本語の再帰動詞の特徴が見えてくるだろう、まとめてみると、以下のとおりである。

① 再帰動詞は一種の他動詞であり、参加者項の他に対象項を持つ。

② 動作が行われた後、対象だけではなく、動作の主体に変化が生じ、主体の変化に主な関心がある。

③ 日本語の再帰動詞の働きは自動詞に近いものである。

では、中国語の再帰動詞は日本語と同じ特徴を持っているのだろうか。

1.2 中国語の再帰動詞

中国語の再帰動詞に関する先行研究は張（1993：531-555）が挙げられる。張（1993）は日本語文法で見られる「再帰動詞」という用語を用い、中国語の動詞の中の「動作が行われた後、動作の作用を及ぼされる対象が結果的に動作主の側に帰して、動作主に何らかの変化をもたらす他動詞」をその指示対象としている。以下は張からの用例である。

(3) 小王穿上大衣出去了。
　　王さんは外套を着て外に出かけた。
(4) 日本人进屋时要脱鞋。
　　日本人は靴を脱いで部屋の中に入る。
(5) 我吃了两碗米饭。
　　私はご飯を二杯食べた。
(6) 他喝了三杯茶。
　　彼はお茶を三杯飲んだ。
(7) 弟弟看电视。
　　弟はテレビを見る。
(8) 妹妹听音乐。
　　妹は音楽を聞く。

(3) と (4) はそれぞれ“穿”と“脱”を用いた例文である。張（1993）によれば、(3)“穿”の動作が終わった後、“大衣”は必ず“穿”の主体である“小王”の身に付けられることとなる。(4)“脱”という動詞は身に付けられているものを取り去る動きを表すものであるので、動作が行われた後、動作主の身に付けられていた洋服または足に履かれていた靴などが取り去られるという結果になる。

また、(5) と (6) の“吃”と“喝”はものを食べたり飲んだりする動きを表す動詞であり、この種の動詞はその表している動作・行為が行われた後、動作の対象である飲食物（例えば“米饭”，“茶”など）が必然的に動作主の体内に摂取されるという結果が見受けられる。

(7) の“看”は視覚他動詞であり、(8) の“听”は聴覚他動詞である。これらの動詞は動作が行われた後、動作の対象となるもの（例えば、ある物事の形態・様子・音声など）が動作主の感覚器官によりとらえられ、知覚されるという結果が生じる、という特徴を共有している。従って、(7) の場合は“看”の動作が実現すると、テレビの映像が“弟弟”の目に写るのは当然であり、そして (8) といえば、“听”の動作がなされた後、音楽のメロディが“妹妹”の耳の中に流れ込んで、“妹妹”によって聞き取られる結果が伴わなければならない。

このように、張（1993）は中国語の再帰動詞を着脱類（例えば“穿，戴，脱，披，系（领带）”など）、飲食類（例えば“吃，喝，餐，饮”など）、感覚器官の作用を表す類（例えば“看，听，闻，尝，摸”など）というふうに３分類している。

張（1993）は日本語学の「再帰動詞」という概念を使用し、そのまま中国語に応用している。しかし、日本語の再帰動詞とぴったり一致する概念が中国語の再帰動詞という概念として有効かどうかは

検討する必要がある。次は張（1993）の指摘した中国語の再帰動詞の着脱類、飲食類及び感覚器官の作用を表す類を分けて、詳しく考察したい。

1.3 中国語の再帰動詞の特徴

Ⅰ 着脱類

まず、着脱類について、分析してみる。“给”を含む使役構文に用いられる動詞の特徴に関しては、田中（2001：135-156）は再帰動詞という用語を使用していないが、“给”を含む使役構文で用いられる動詞を身体に物理的な影響を及ぼす動詞（着脱や入浴に関する）と人間の五感に関係する他動詞というふうに２分類している。田中によれば、身体に物理的な影響を及ぼす動詞は、何かを移動させたり、操作したりすることによって、動作主がものや人に接触することを意味する。そして、動作主によって移動させられたり、操作されたりする物、あるいは動作主によって接触された物や人は、その行為によって物理的な影響を受けることになる。具体的には“穿（上）”、“套上”、“戴”、“吊”、“带上”、“脱”が当てはまる。一方、人間の五感に関係する他動詞は視覚、味覚、聴覚など人間の生存に関わる基本的な動作を表す動詞である。具体的には“看”、“吃”、“尝”、“喝”、“听”にあたる。しかし、次の例文を見られたい。

(9) 我和他一样一样地检点拾来的东西：各种尺寸的帽子――可以给自己戴，也可以给别人戴。『人啊，人』

私と彼は、拾ってきた物をひとつひとつ調べていった。いろんなサイズの帽子――自分でかぶってもいいし、人にかぶせてもいい。

上の例文から分かるように、中国語の“戴”は「自分でかぶってもいいし、人にかぶせてもいい」。換言すれば、自分でかぶっても、人にかぶせても、中国語ではすべて“戴”で表現する。つまり、中国語の着脱類の動詞は動作が終わった後、動作の作用を及ぼされる対象が動作主の側に帰した場合と帰さない場合両方とも存在しうる。従って、中国語の着脱類の動詞は純粋な再帰動詞ではないということが窺える。

それに、張（1993）によれば、着脱類の“脱”という動詞は脱がれた洋服または靴などは、必ず動作主自身が着ていたまたは履いていたものでなければならないと述べている。また、“穿”に関しても、動作が終わった後、洋服などは必ず“穿”の主体である体に着られるとしている。しかし、次の例文に見られるように、張（1993）の記述は妥当なものとは言えない。

(10) a 我脱了外套。
　　私は上着を脱いだ。
　b 我脱了孩子的外套。
　　＊私は子供の上着を脱いだ。
　　私は子供の上着を脱がせた。

(10) は他動詞“脱”を使用している。(10) a の動作の主体は「私」であり、動作を行った結果、

「上着」は確かに動作主自身の体から取り去られ、動作が終わった後、動作の作用が及ぼされる対象は動作主の側である。しかし、(10) b の場合は異なる。(10) b の動作の主体は「私」でありながら、動作が行った結果、脱がれたのは動作の主体の「私」ではなく、「子供」のほうである。つまり、(10) b の“脱”という動作が終わった後、“脱”の作用が及ぼされる対象は動作主の側ではない。こういう現象はいわゆる“把”構文の中でも生じている。

(10) c 我把孩子的外套脱掉了。
＊私は子供の上着を脱いだ。
私は子供の上着を脱がせた。

このように、“脱”という他動詞は動作が終わった後、動作の作用が及ぼされる対象は動作主の側に帰する場合（脱がせる）と帰さない場合（脱ぐ）両方とも存在する。では、おおよそ“脱”の対義語にあたる他動詞の“穿”はどうだろうか。次の例文を参照されたい。

(11) a 他穿上了毛衣。
彼はセーターを着た。
b 他穿上了爸爸的毛衣。
彼は父のセーターを着た。
c 他把爸爸的毛衣穿上了。
彼は父のセーターを着た。

他動詞の“穿”の場合は“脱”と異なり、(11) a も (11) b も“穿”という動作が終わった後「セーター」であるか「父のセーター」であるかによらず、結果として“穿”の作用が及ぼされる対象は動作主の側「彼」である。しかし、次の例文の存在を無視することはできない。

(11)' a 他把毛衣穿在身上。
彼はセーターを自分の体に着た。
b 他把毛衣穿在小王的身上。
＊彼はセーターを王さんの体に着た。
彼はセーターを王さんの体に着せた。

(11)' a とは異なり、(11)' b は“穿”が再帰的動作を表しているとは解釈できない。なぜなら、(11)' b の場合は“穿”という動作の主体は「彼」であるが、動作を行った結果、「セーター」が「彼」ではなく、「王さん」の身に付けられるからである。つまり、“穿”という他動詞は、先述した他動詞“脱”と同様、動作の主体のみならず、動作の主体以外のモノに対する働きかけを表せるのである。

以上のように、他動詞の“脱”や“穿”などという動詞は動作が終わった後、動作の作用が及ぼされる対象は動作主の側に帰する場合（再帰的用法）と帰さない場合（非再帰的用法）の両方が存在し

うるから、“脱”や“穿”のような着脱類の動詞は純粋な再帰動詞とは言えないと考える。これらは再帰的用法をもつが、再帰動詞ではない動詞である。着脱類の動詞に関しては、次章で『日中対訳コーパス』からの例文を用いて、詳しく分析してみる。

Ⅱ　飲食類

上に述べたように、着脱類の動詞は純粋な再帰動詞ではない。一方、飲食類の動詞ではどうだろうか。次の例文を見てみよう。

(12)　a　我吃了蛋糕。
　　私はケーキを食べた。
　　b　我吃了妈妈的蛋糕。
　　私は母のケーキを食べた。
　　c　我把妈妈的蛋糕吃了。
　　私は母のケーキを食べた。

(12) は他動詞の“吃”を用いた例である。(12) a、(12) b 及び (12) c の示したように、“吃”という動作が終わった後、「ケーキ」が他でもなく動作の主体である「私」の側に帰する。下のように、“喝”も同じような振る舞いが見られる。

(13)　a　弟弟喝了果汁。
　　弟はジュースを飲んだ。
　　b　弟弟喝了妹妹的果汁。
　　弟は妹のジュースを飲んだ。
　　c　弟弟把妹妹的果汁喝了。
　　弟は妹のジュースを飲んだ。

このように、飲食類の“吃”や“喝”という他動詞は動作が終わった結果、動作の作用対象である「ケーキ」や「ジュース」などは動作主の側に帰する。つまり、「ケーキ」はほかの誰かではなく、「私」のお腹に入らなければいけない。「ジュース」も「妹」と関係なく、「弟」の体内に飲み込まれるということである。飲食類の他動詞は一種の再帰動詞である。

Ⅲ　感覚器官の作用を表す類

上に考察した飲食類の動詞は一種の再帰動詞と言える。では、感覚器官の作用を表す類はどうであろうか。次の例文を見られたい。

(14)　a　我看了比赛。
　　私は試合を見た。
　　b　我看了爸爸的比赛。

私は父の試合を見た。

c 我把爸爸的比赛看完了。

私は父の試合を見た。

(15) a 小王听了故事。

王さんはストーリーを聞いた。

b 小王听了爷爷的故事。

王さんはお爺さんのストーリーを聞いた。

c 小王把爷爷的故事听完了。

王さんはお爺さんのストーリーを聞いた。

例文の (14) と (15) が表すように、感覚器官の作用を表す類の“看”や“听”という動詞は動作が行われた後、動作の対象となるものの「試合」や「ストーリー」が、他のものではなく動作主の感覚器官によりとらえられ、知覚される。ゆえに、(14) の場合は「試合」は「私」の目に映るのであり、そして (15) の場合は「ストーリー」が「王さん」の耳の中に流れ込むしかない。従って、感覚器官の作用を表す類に関係する他動詞は一種の再帰動詞と言える。

以上のように、飲食類と感覚器官の作用を表す類の他動詞は、張 (1993) の指摘したように、再帰動詞と見ることができる。一方、着脱類の他動詞は (少なくとも純粋な) 再帰動詞ではない。次に再帰動詞と“给”使役文の関わりについて、『日中対訳コーパス』から得られた例を利用して、考察を試みる。

2 再帰動詞と“给”使役文の関係

この節では筆者は『日中対訳コーパス』に現れている例文を取り上げ、再帰用法をもつ動詞、純粋な再帰動詞及び非再帰動詞に分けて、“给”を伴う場合の文の特徴を分析する。また、着脱類、飲食類及び感覚器官の作用を表す類といった再帰用法をもつ動詞や純粋な再帰動詞以外の動詞も取り上げる。

2.1 再帰用法をもつ動詞と“给”共起の場合

A 着脱類

次の例を見られたい。

(16a) 衣服弄好了，我给小鲲穿上试试。『人啊，人』

服が仕上がり、小鯤に着せてみた。

(17a) “你没看见小妹病了吗？”陆文婷瞪了园园一眼，忙给佳佳脱了衣服，把她放在床上，替她盖上被子。『人到中年』

「佳佳ちゃんが病気なの見て分かるでしょ」陸文婷は目で園園を叱り、佳佳の服を脱がせてベッドに寝かせ、布団のはしを押さえてやった。

(18a) 他给孩子洗澡。他给孩子剪手指甲脚指甲。他剪指甲比静宜还耐心细心，静宜给婴儿的倪藻剪指甲的时候剪破过倪藻的娇嫩的手指，流出了一丝丝血。『活动变形人』

子供をお風呂にいれ、手足の爪を切ってやり、静宜より細やかに世話をやく。静宜などは赤

ん坊の倪藻の爪を切ってやりながら柔らかい指を切ってしまい、血がドクドクと流れ出た。

(19a) 她想伸过手去，拉一件衣服给他披上，可是手动不了，它好象不是属于自己的了。『人到中年』
手を伸ばして彼に上着でも被らせてやりたい、それなのに手が動かない、まるで自分の手ではないみたいだ。

上の例文（16a-18a）では、“小鯤”や“佳佳”や“孩子”は幼い子供であり、動詞の表す動作すなわち“穿”、“脱”、“洗澡”を自らすることが困難だという設定が文脈から明らかである。例文はそれぞれ、これらの行為を、動作の主体であり、文の主語でもある“我”や“陆文婷”や“他（お父さん）”にしてもらったことを表す。張（1993）は上のような表現を「手助け」の動きを表す用法であると指摘した。例文の（19a）は“他”は大人と見られ、「上着をかぶる」ことができるはずだが、“披”という動作の主体は、主語の“他（彼）”でなく、“她（彼女）”である。

以上の文にはすべて“给”が使われており、動詞は非再帰用法をもつ。もし、上の例文の“给”を使役のマーカー“让”に変えると、文としては成立するが、意味的には異なる文になる。

(16b) 衣服弄好了，我让小鯤穿上试试。『人啊，人』
服が仕上がり、許鯤に着させてみた。

(17b) “你没看见小妹病了吗？”陆文婷瞪了园园一眼，忙让佳佳脱了衣服，把她放在床上，替她盖上被子。『人到中年』
「佳佳ちゃんが病気なの見て分かるでしょ」陸文婷は目で園園を叱り、佳佳の服を脱がせてベッドに寝かせ、布団のはしを押さえてやった。

(18b) 他让孩子洗澡。他给孩子剪手指甲脚指甲。他剪指甲比静宜还耐心细心，静宜给婴儿的倪藻剪指甲的时候剪破过倪藻的娇嫩的手指，流出了一丝丝血。『活动变形人』
子供をお風呂に入らせ、手足の爪を切ってやり、静宜より細やかに世話をやく。静宜などは赤ん坊の倪藻の爪を切ってやりながら柔らかい指を切ってしまい、血がドクドクと流れ出た。

(19b) 她想伸过手去，拉一件衣服让他披上，可是手动不了，它好象不是属于自己的了。『人到中年』
手を伸ばして彼に上着でも被らせてやりたい、それなのに手が動かない、まるで自分の手ではないみたいだ。

上のように、“给”を使役マーカーの“让”に変えると、文自体は使役の意味を表すが、動作動詞の“穿”や“脱”や“洗澡”や“披”の動作をするのは主語の“我”や“陆文婷”や“他（お父さん）”や“她”ではなく、動詞の直前の“小鯤”“佳佳”“他”“孩子”のほうである。日本語でいう「着せる」と「着させる」のような意味の違いが現れるわけである。

また、“给”を授益のマーカーである“为”に変えれば、次のようになる。

(16c) 衣服弄好了，我为小鯤穿上试试。『人啊，人』
服が仕上がり、許鯤に着せてみた。

(17c) “你没看见小妹病了吗？”陆文婷瞪了园园一眼，忙为佳佳脱了衣服，把她放在床上，替她盖上被子。『人到中年』

「佳佳ちゃんが病気なの見て分かるでしょ」陸文婷は目で園園を叱り、佳佳の服を脱がせてベッドに寝かせ、布団のはしを押さえてやった。

(18c) 他为孩子洗澡。他给孩子剪手指甲脚指甲。他剪指甲比静宜还耐心细心，静宜给婴儿的倪藻剪指甲的时候剪破过倪藻的娇嫩的手指，流出了一丝丝血。『活动变形人』
子供をお風呂にいれ、手足の爪を切ってやり、静宜より細やかに世話をやく。静宜などは赤ん坊の倪藻の爪を切ってやりながら柔らかい指を切ってしまい、血がドクドクと流れ出た。

(19c) 她想伸过手去，拉一件衣服为他披上，可是手动不了，它好象不是属于自己的了。『人到中年』
手を伸ばして彼に上着でも被らせてやりたい、それなのに手が動かない、まるで自分の手ではないみたいだ。

上の例文から分かるように、“给”を“为”に変えると、意味的には原文の表す意味を維持することができ、授益的意味を表す。これについて、田中（2001：135）も「被使役者の動作主性が低くなり、受益文に非常に似てくる」と述べている。しかし、“为”を含む構文に関しては、上の示した授益の意味の他に、もう一つの「再帰非使役」の用法が存在する。例えば（16c）を「再帰非使役」的に解釈する場合、“小鲲”はこの洋服が私に一番ぴったりと思っており、“我（私）”は“小鲲”に「着て欲しい」と言われる。そこで、“我（私）”その洋服をはあまり気に入っていないが、“小鲲”のために試着してみる、という意味を表す。この時も（16c）と全く同様の“我为小鲲穿上试试”で表現することができる。これはまさに一種の再帰用法である。なぜなら、この文の動作主体が“我（私）”であり、“穿（着る）”という動作を行った結果、「洋服が私の体に帰した」ことになるからである。それに対して、“给”を含むこのような構文は「再帰非使役」の用法が成立しない。

また、着脱類の動詞は上で取り上げた動詞の他に、“换（着換えする）”と“套（はおる、はく）”もある[2)]。

次に、用法が着脱類の動詞と似ているが、着脱類以外の動詞も挙げる。

B　身体部位を対象とする他動詞

今回の調査では、着脱類以外の動詞も出現した。これらの動詞は人間の身体部位に対し、動作を行う動詞と見られるため、筆者はこの種類の動詞を「身体部位を対象とする他動詞」と名づける。以下の例を見られたい。

(20) “大家都过来，我要给你们剪头发！”我说。『轮椅上的梦』
「みんなおいで、これから床屋さんをしてあげるよ!」私は言った。

(21) 朱铁汉开口了：“……你没见，大泉哥出门头天晚上，我瞧着他那脑袋瓜子两个来月都没顾上剃剃，差不多可以梳成小辫子了。这个样子上县见领导多难看。我就张罗给他剃剃。好家伙，我在那给他剃着头，他还得跟互助组的一个一个地谈心思，摆工作。哎呀呀，有这么忙的没有呢？……”『金光大道』
朱鉄漢が口を開いた「……見たろ、大泉さんが出掛ける前の晩、ふた月も髪が伸び放題なもんだから、お下げても編めるくらいボウボウになっちまってよ。これじゃあ県に行って幹部に会うてのにみっともない、そう思っておれは頭を刈ってやったんだ。それがどうだ、おれが頭を

刈ってる最中にも互助組の人たちの相談に乗ってやり、仕事の按配をしなくちゃなんねえ始末だ。いやあ、まったく忙しかったの忙しくなかったの……」

(22) 紫茄子扯过枕头给儿子垫在脑袋下边，又从墙上摘下一件小棉大衣，给儿子盖上。『金光大道』
「青ナス」は枕を引っぱって子どもの頭の下にあて、壁にかかっていた綿入れのオーバーを取ってかけた。

(23) 秦文庆赶紧从外边打来一盆凉水，要给朱铁汉擦擦脸上的汗水和泥土。『金光大道』
秦文慶は外から洗面器に水をくんできて朱鉄漢の顔の汗と泥を拭く。

(24) 她点燃一支纸烟吸着，然后又说，“张先生，你问我累不累？给人做活哪有不累的呀！文台他娘是阔家小姐出身，见天给她梳头打洗脸水不算，洗洗缝缝的事总也没个完。”
かの女は、紙巻煙草に火をつけて吸いだした。「張先生、疲れるかって？そりゃあ、他人に使われてるんですよ、疲れるのは当然ですよ。文台のおっかさんは、金持のお嬢さんの出だもんで、朝から晩まで、やれ髪を梳け、顔を洗う水をもってこい、おまけに洗い物だ、縫物だって、終りというものがなくてね」

以上に挙げられた動詞はそれぞれ“剪”“剃”“盖”“擦”“梳”である。例文を見ると、これらの動詞の後に人間の身体部位を表す目的語が現れることがわかる[3]。しかし、それらの「身体部位」は“给”の後にくるヒトの身体部位しか認められないから、「身体部位を対象とする他動詞」は「着脱類」と同様のふるまいを示すと言える。

2.2 純粋な再帰動詞と“给”共起の場合

この節では、純粋な再帰動詞の特徴を明らかにする。再帰動詞としては飲食類と感覚器官の作用を表す類のような動詞、そして、それ以外の再帰動詞を取り上げる。飲食類と感覚器官の作用を表す類のような動詞は“给”と共起する場合も、再帰用法を維持することができると結論付ける。

A 飲食類と感覚器官の作用を表す類

(25a) “我只问她，你在家里作什么消遣？ 心境如何？ ——可是我并没拿出你的信给她瞧。”『霜叶红似二月花』
「ぼくが彼女にたずねたのは、君は家で何をしているのだろう？どんなことを考えているのだろう？と、ただそれだけさ。——手紙は見せなかったよ」

(26a) 恂少奶奶忽然想起了什么，一边高高兴兴说：“婉姊，我给你看一样东西，”『霜叶红似二月花』
宝珠はふと何事か思い出したふうに、「そうだわ、いいものがあったわ」

(27a) 周忠见邓三奶奶脸上有光，赶紧问：“怎么一个门路，快说给我听听。”『金光大道』
周忠は鄧ばあさんの目が輝いているのを見た。「どんな見当か聞かせてくれや」

(28a) “有意思！”道静冷冷地说，“可是，你今天为什么就不肯把馒头给别人了呢？ 那一桌子好吃的东西，怎么就不肯给老头吃呢？”『青春之歌』
「おもしろいわ」、道静の声は冷たかった。「だけど、あなたはなぜ今日、あのおじいさんに、饅頭をあげようとしなかったの？ あのテーブルに並べてあるご馳走を、どうして、たべさせ

てあげなかったの？」

(29a) “房东也游行去了吗？ 怎么连口水都不给你喝？ 你们问以后怎么办吗？”『青春之歌』
「家主もデモにいっちまったの？ 病気のあなたに、お湯も沸かしてくれないなんて？ これからどうするかですって？」

上に挙げた例文は“给 ”の後に来る動詞はそれぞれ“瞧”“看”“听”“吃”“喝”である。これは張の示した飲食類と感覚器官の作用を表す類に当てはまる。これらの動詞の動作主はそれぞれ“她”、“你”、“我”、“老头”、“你”である。例えば、(25a) の場合は動詞“瞧”を行う動作主が“她”であり、“你的信”は“她”の目にしか映らない。他の例文についてもほぼ同じことが言える。
上の例文を授益構文のマーカー“为”に変えると、すべて非文となる。

*(25b) “我只问她，你在家里作什么消遣？ 心境如何？ ——可是我并没拿出你的信为她瞧。”『霜叶红似二月花』
「ぼくが彼女にたずねたのは、君は家で何をしているのだろう？ どんなことを考えているのだろう？ と、ただそれだけさ。——手紙は彼女のために見ていなかったよ」

*(26b) 恂少奶奶忽然想起了什么，一边高高兴兴说：“婉姊，我为你看一样东西，”『霜叶红似二月花』
宝珠はふと何事か思い出したふうに、「そうだわ、いいものを見てあげる」

*(27b) 周忠见邓三奶奶脸上有光，赶紧问：“怎么一个门路，快说为我听听。”『金光大道』
周忠は鄧ばあさんの目が輝いているのを見た。「どんな見当か聞いてくれや」

*(28b) “有意思！”道静冷冷地说，“可是，你今天为什么就不肯把馒头给别人了呢？ 那一桌子好吃的东西，怎么就不肯为老头吃呢？”『青春之歌』
「おもしろいわ」、道静の声は冷たかった。「だけど、あなたはなぜ今日、あのおじいさんに、饅頭をあげようとしなかったの？ あのテーブルに並べてあるご馳走を、どうして、たべてあげなかったの？」

*(29b) “房东也游行去了吗？ 怎么连口水都不为你喝？ 你们问以后怎么办吗？”『青春之歌』
「家主もデモにいっちまったの？ 病気のあなたに、お湯も飲まないでくれないなんて？ これからどうするかですって？」

上の例に示したように、“给”を用いて表現された文は“给”を“为”に変えると、文としては成立しない。田中（2001：144）は「このような動詞の表す動作は人間の生存にかかわる基本的な動作であるため、他人が代わりに行うという状況は考えにくい。」と述べている。上の例を“让”に変えると次のようである。

(25c) “我只问她，你在家里作什么消遣？ 心境如何？ ——可是我并没拿出你的信让她瞧。”『霜叶红似二月花』

「ぼくが彼女にたずねたのは、君は家で何をしているのだろう？ どんなことを考えているのだろう？と、ただそれだけさ。——手紙は見せなかったよ」

(26c) 恂少奶奶忽然想起了什么，一边高高兴兴说："婉姊，我让你看一样东西，"『霜叶红似二月花』
宝珠はふと何事か思い出したふうに、「そうだわ、いいものがあったわ」

(27c) 周忠见邓三奶奶脸上有光，赶紧问："怎么一个门路，快说让我听听。"『金光大道』
周忠は鄧ばあさんの目が輝いているのを見た。「どんな見当か聞かせてくれや」

(28c) "有意思！"道静冷冷地说，"可是，你今天为什么就不肯把馒头给别人了呢？ 那一桌子好吃的东西，怎么就不肯让老头吃呢？"『青春之歌』
「おもしろいわ」、道静の声は冷たかった。「だけど、あなたはなぜ今日、あのおじいさんに、饅頭をあげようとしなかったの？ あのテーブルに並べてあるご馳走を、どうして、たべさせてあげなかったの？」

(29c) "房东也游行去了吗？ 怎么连口水都不让你喝？ 你们问以后怎么办吗？"『青春之歌』
「家主もデモにいっちまったの？ 病気のあなたに、お湯も沸かしてくれないなんて？ これからどうするかですって？」

上の文は"给"のところを使役マーカーの"让"に変えたものであり、文はすべて成立する。動詞の"瞧""看""听""吃""喝"という動作を行ったのは動詞の直前に現れた"她"、"你"、"我"、"老头"、"你"である。これは原文の"给"を含む例文と意味的には同様であると考える。

飲食類と感覚器官の作用を表す類は中国語の純粋な再帰動詞と見なすことができる。またここでの"给"は意味的には使役を表している。このことから、"给"は再帰的動作の「使役」を表すと分析できる。次に、飲食類と感覚器官の作用を表す類以外の再帰動詞を挙げてみる。

B「身体部位を対象とする他動詞」

(30) 这一土改，给我开了脑筋。『金光大道』
今度の土地改革では目を開かしてもらったよ。

以上に挙げたのは『日中対訳コーパス』から採取した例である。身体部位を対象とする他動詞の中には、対象となる身体部位が動作主体のものかどうかで意味が大きく異なるものがある。この場合には、"给"を伴うことができるのは、動作主体の身体部位への再帰的動作を表す意味のときだけであり、"给"が存在することにより使役の意味が現れる。

それに対して、"？他给我的脑筋开了。"の場合、"开"という動作主体は"他"であるが、対象となる身体部位の"脑筋"が動作主体の"他"のでなく、"我"のものと認識されるため、この文は使役の意味になれない。この場合の"开"は「開ける」という意味であり、つまり「私の頭を開けた（私を殺した）」という意味になってしまう。

2.3 非再帰動詞と“给”共起の場合

山田（1999：23-30）及び佐々木（1999：207-216）などが指摘している「使役者から被使役者へのものや行為の授与が含意される」動詞がこの分類にあたる。

構文の特徴として、「“给”＋受け手＋対象＋動詞」と「“给”＋受け手＋動詞＋対象」の両方の語順が可能である場合が多い。コーパスに表れるものは前者が多いが、多くの場合は後者の語順も可能である。これらの構文は、使役としても授益としても解釈できる場合が多い。使役の意味を表す時、この動詞は典型的な他動詞ではない傾向が見られる。次の例を見られたい。

(31) 冷支队长冷冷一笑，说：“占鳌兄，兄弟也是为你好，王旅长也是为你好，只要你把杆子拉过来，给你个营长干。枪饷由王旅长发给，强似你当土匪。”『红高粱』
冷支隊長はせせら笑った。「占鰲、おれはもちろん、王旅団長もあんたのためを思ってのことだ。武器をもってきてくれりゃ、あんたは大隊長になってもらう。軍費は王旅団長もちだから、盗賊をやるよりはましだぞ」

(32) 他一步跨到歪嘴子跟前，高声喊道：“乐二叔的病是给你干活累的，……”『金光大道』
かれは「口まがり」の目の前におどり出た。「楽二叔の病気は、あんたのために働きすぎてなったんだ、……」

例文の (31) は後にくる動詞が他動詞とみられる“干（する）”である。“给你个营长干”は“给你干个营长”とも言える。この場合、文脈からも分かるように、“给你干个营长”は“让你干个营长”と意味的には同様である。従って、この文は使役の意味を表すと考えられる。一方、例文 (32) は後にくる動詞が例文 (31) と同じく、他動詞の“干（する）”であるが、この場合“给你干活累的”は意味的には“为你干活累的”と同じことである。そのため、この文は授益の意味を表すと言える。また、使役の意味を表す (31) は“干（する）”という動詞が目的語の“营长”に作用し、“营长”に何らかの変化が起こるとは考えにくい。以下の例でも同じ意味をもつ構文の交替をテストとして使用する。

(33) 你对他说，地种不上，就收不来粮食，长不了棉花，就没法交公粮，工人就没吃的，机器就没原料，就织不了布给他做棉衣裳，就不能支援抗美援朝。『金光大道』
それに、種蒔きがやれねえと穀物はとれねえし、綿も育たねえ、そうなりゃ供出ができなくなって、労働者は食うもんがねえ、機械にゃ原料がねえで、父っつぁまの着るもんも作れなけりゃ、抗米援朝を支援することもできなくなる。

(34) 主持这个典礼的是克明，因为高老太爷觉得自己年纪大了，便把这些事情交给儿子去做，自己等到一切预备好了才出来给祖宗行礼，受儿孙们的拜贺。『家』
祭主は克明である。高老太爺が自分がもうたいそう年をとっているという理由で、息子にこの仕事を譲ったからで、自分はいっさいの準備ができてから出て来て先祖に拝礼を行い、それから子や孫からの拝賀を受けるのである。

上の例文 (33) と (34) は非再帰動詞の“做（作る、する）”を用いている。意味的には (33) は授益

の意味を表すが、それに対して (34) は使役の意味を表す。一方、授益の意味を表す (33) は“做（作る)”という動詞が目的語の“棉衣裳”に作用することは考えられるが、(34) の“做（する)”は非常に抽象的な行為一般を表現しており動作動詞として目的語への作用は見られない。

3 まとめ

以上の考察から分かるように、中国語の記述にとって再帰動詞という概念が有効だと言えるが、日本語の再帰動詞とは異なるところがある。中国語の再帰動詞は飲食類と感覚器官の作用を表す類しか認められず、着脱類に関する他動詞は純粋な再帰動詞ではない（再帰的な解釈と非再帰的な解釈の両方が可能）と考える。従って、“给”を含む構文に着脱類の他動詞が現れると、意味的には使役ではなく、授益の意味となる。また、“给”と共起する場合、再帰用法でなくなることも分かった。それに対して、“给”を含む構文に飲食類と感覚器官の作用を表す類の再帰動詞が現れて、文が成立している場合、意味的には使役の意味を表すことが分かった。

一方、後にくる動詞が一般の他動詞の場合、文全体は意味的には使役を表すパターンと受益を表すパターンと両方が存在しうるということが明らかになった。“给”によって使役の意味を表すことのできる後続動詞は典型的な他動詞ではない傾向が見られる。

中国語学において、品詞分類は大きな問題である。二項他動詞としての着脱動詞のような授益構文に表れる“给”は、介詞として分類することができる。介詞“为”と置き換え可能であることもその根拠となる。しかし、再帰動詞の使役に現れる“给”は、“让”と同様に、使役動詞とみることができるだろうか。あるいは、“看”などの述語が日本語の「見せる」のような二項他動詞ではたらいており、“给”自体は「介詞」とみるべきだろうか。その他、“让”を用いるか、“给”を用いるかで同じ使役でも意味が異なる場合があることを含め、さらに検討が必要である。

また、他動詞構文に現れる「典型的ではない他動詞」がどのような下位分類をもつかは、今後の課題とする。

〈注〉

1). 下線は筆者が引いたものである。

2). ①の“换”は「着換えする」という意味であり、意味も用法も“穿”と似ている。この文の場合は“叔叔（叔父)”がすでに「死んでいた」ことが文脈から分かった。従って、“换（着換えする)”という動作を行ったのは死んだ“叔叔（叔父)”でなく、“她（おばさん)”の方であることが明らかになる。②の“套（はおる、はく)”も同様な特徴が見られる。

① 她艰难地走到尸首前，当众给叔叔换上了一身干净衣服。一锹锹黄土倒在他干净的衣服上。埋了。叔叔还不到四十岁……『人啊，人』

苦労して遺体の前に行き、衆人の前で叔父をきれいな衣服に着換えさせた。スコップで黄土がきれいな衣服の上にかけられていった。埋められた。叔父はまだ四十歳になっていなかった……。

② 他刚要摸，钱彩凤已经蹲下身，扒掉了他脚上的两只旧鞋，挺麻利地把两只黑斜纹布面、千层底的新鞋给他套在脚上了。『金光大道』

それに手をやろうとしたら、銭彩鳳はもう足元にしゃがんで、はき古した両方の靴をさっさと脱がせ、おろしたての黒地の布靴をはかせていた。

3). 例文(22)の"盖"の後に身体部位を表す目的語が現れていないが、それが「息子の体にかける」ことは文脈から分かる。このような身体部位が現れていないが、文脈から分かるタイプの動詞についても、筆者は「身体部位を対象とする他動詞」に分類する。

参考文献

Charles N. Li and Sandra A. Thompson (1981) Mandarin Chinese: *A functional reference grammar*. Berkeley Los Angeles London: University of California Press 371-389

金田一春彦・林大・柴田武編 (1995) 『日本語百科大事典』 大修館書店 174

工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテクスト－現代日本語の時間の表現－』 ひつじ書房 69-80

吕叔湘 主編 (1999) 《现代汉语八百词》(增订本) 商务印书馆 146-149

仁田義男 (1982) 「再帰動詞、再帰用法－Lexico-Syntax の姿勢から－」 『日本語教育』47 日本語教育学会 79-90

佐々木勲人 (1999) 「南方方言における GIVE の処置文」 『中国語学』 246 号 207-216

田中智子 (2001) 「「给」使役文について」 『言語情報科学研究』第六号 東京大学言語情報科学研究会 135-156

山田忠司 (1999) 「《儒林外史》における"给"の用法」 『中国語学』 246 号 23-30

張 斌 (2010) 『现代汉语描写语法』 商務印書館 618-621

張 威 (1993) 「中国語再帰動詞及びその特殊用法－"給～＋再帰動詞"をめぐって－」 『中京大学教養論州』34 巻 第 2 号 531-555

A Review of the Chinese Causative-like Constructions with the Marker "gei" -with a special reference to lexically reflexive verbs

Mengjuan LI

Of the multifunctional usages of the Chinese verb "*gei*", this paper examines apparently causative constructions in terms of the verbs of the caused event. The lexically reflexive verbs, initially proposed in Japanese linguistics, are known to allow causative-like constructions wi th "*gei*" in Chinese. These verbs are divided into two classes: the pure reflexives vs. non-reflexive verbs with reflexive usage, which is precluded by "*gei*" as the marker of the indirect object. Substitution of "*gei*" with the beneficiary marker "wei" results in ambiguity between reflexive and non-reflexive readings of non-reflexive verbs. Examination of corpus data shows that "*gei*", unlike other causative markers, occurs only with verbs of lower transitivity including reflexives.